

明治期における村落景観の変容

— 紀伊国伊都郡境原村 —

出田和久

はじめに

- 一 明治期における村落景観
- 二 明治期における村落景観の変化—地目変化を手がかりにして—
- 三 土地所有からみた村落構造
- 四 おわりにかえて

論文要旨

近代化を村落のレベルでミクロに検証した研究は、主に農村社会学や民俗学において多くの蓄積を得ているが、それらは日本の伝統的村落においては近世に形成された村落ゲマインシャフトが、基本的に昭和初期までは維持していたことを見出し出している。地理学的に換言すれば、社会関係の空間的枠組みには基本的に変化がみられなかったことである。しかし、近世村落を大きく特徴づけ、共同体規制さらには精神的結合の政治経済的基礎ともいえる村請けが、地券公布と地租改正によつて土地私有が法認されたのにもない崩壊したことは、村落景観に大きな影響を与えたと考えられるが、その点については関心が向けられていないようにも思える。地券公布や地租改正で必ずしも直ちに共同体に変化が生じたというわけではないが、紀ノ川流域の橋本付近では特に貨幣流通経済との接触を通じて農民行動における経済的合理性指向の基礎形成が進行していたと考えられる。したがって、地租

改正等が共同体の紐帯が弛緩する契機となったことは十分に首肯できることであるので、本稿では近代化にともなつて生じた村落社会の変動を村落景観とその変容を通じて捉えることを試みた。

その結果、研究対象地域とした旧境原村においては、宅地の周囲に耕地が比較的集り、耕地の分散錯圃は顕著ではないこと。極少数の家の土地所有における優位性が極めて著しいものであること。農家の経営規模は、近代初頭においては極めて零細であり、田の所有面積が三反未満の所有者は五割を超え、一町を超える者は一割にしか過ぎなかった。これは現代とも基本的にはかわりないこと。明治期における耕地面積の増加は、人口増加に見合うほどの量ではないが、明治初期における溜池の築造が比較的活発に行われたように、水田化の努力はみられた。また、溜池築造や水路開削などの水利条件の改善による生産性向上の意味も看過できないこと等が明らかになった。